体育科

子どもが「学びをつなぐ」体育科学習

山本　亮　　黒木　敬博

昨年度までの研究の概要

体育科研究部では、子どもが学んだことを実生活や実社会に生かし、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続していくためには、教師が子どもの発達の段階や実態を踏まえた学習指導を展開し、運動の魅力や特性にふれる体験をさせていく必要があると考えている。そして、仲間と協働的に学びながら、運動を「する」だけではなく「みる」「支える」「知る」等、運動に多様にかかわらせることで、より多面的に運動に夢中になる子どもを育成することができると考えている。

昨年度は、上記を踏まえ、「運動者と観察者の立場を往還するためにはどうあればよいか」、また「活動中の自発的なふりかえりはどうあればよいか」の２点で研究を行った。それにより、以下の気付きがあった。

「運動者と観察者の立場の往還」
　→　学習課題の難度に応じて、どの立場にどのような内容の視点を与えるかが重要である。
「活動中の自発的なふりかえり」
　→　より自発的なふりかえりを促すためには、課題解決に必要な動きを具体的に捉えさせ、それを意識して互いの動きを評価できるような手立てを取る必要がある。

本年度は、これらを追究するべく「運動に多様にかかわるための学びの視点の在り方」と「自発的なふりかえりを促すための教師の言葉かけの在り方」について研究を進めていく。

なお、体育科研究部がめざす「学びをつなぐ姿」は以下のとおりである。

○　言葉や動作等による身体の対話をとおして仲間と協働的に学ぶことで、特性に応じた各種の運動の行い方を理解し、「する」「みる」「支える」「知る」等、運動に多様にかかわる姿
○　様々な動きや運動を経験するなかで、それらに内在する「共通性」や「汎用性」を見いだすとともに、仲間の身体から得た気付きを基に、自分なりにつかんだこつを生かしながらスムーズに身体を動かす姿

研究内容

1　子どもが「学びをつなぐ」ための学習指導の在り方
⑴　運動に多様にかかわるための学びの視点の在り方
⑵　自発的なふりかえりを促すための教師の言葉かけの在り方

研究内容の基本的な考え方

1　子どもが「学びをつなぐ」ための学習指導の在り方

⑴　運動に多様にかかわるための学びの視点の在り方

体育科は、身体的活動を主とし、自他の言語的・非言語的な身体の対話によって運動（動き）そのものを学びの対象とする教科である。また、仲間と協働的に学ぶことをとおして、運動を「する」だけでなく「みる」「支える」「知る」等の立場で運動に多様にかかわりながら学び方を学んでいく。そして、これらは、単元間や領域間において、汎用性や横断的な視点をもって運動に取り組み、系統的な学びを積み重ねていくことで、より深めていくことができると考える。

本年度は、これまでの学びの履歴を基に、学習課題に応じて、どの立場にどのような学びの視点をもたせるかを工夫し、対話させることで、協働的に学びをつなぎながらより運動に多様にかかわることができるようにしたい。

【体育科研究部としての捉え】
○　学びの履歴：単元において仲間と共有した学び（主に、知識及び技能）
…　仲間の動きからの気付き（動きのポイント）→自己のよりよい動き（動きのこつ）につなぐもの
○　学びの視点：上記を含む、本単元と既習の単元において共通性・汎用性のある学び（３つの資質・能力）
…　「みる」「支える（アドバイスを含む）」等の協働的に学びをつなぐもの

⑵　自発的なふりかえりを促すための教師の言葉かけの在り方

子どもが、自分や仲間のよさや可能性を認識し、仲間を価値ある存在として尊重しながら運動することができるようにしていくためには、子ども自身が自発的にふりかえり、仲間同士で互いを評価し合うかかわりが必要不可欠である。そしてそこには、教師の言葉かけが重要な意味をなす。それがあることで、ふりかえる場面や内容に必然性や具体性が生まれ、子どもの思考が広がったり深まったりして、自己の動きを高めていくことへとつなぐことができると考える。

本年度は、よりよい自発的なふりかえりを促すための手立てとして、教師の言葉かけを工夫することで、子ども自身が、自ら適宜学びをふりかえりながら、「思うような動き」や「課題解決に必要な動き」を身に付けることができるようにするとともに、学びを自覚し、自己の動きをよりよいものへと高めることができるようにしたい。

【自発的なふりかえり】
課題解決に向けた個々の学びを共有するための、活動中（ゲームとゲームの間、動きと動きの間等）に、適宜互い（運動者同士、運動者と観察者）に動きを評価する（でき具合についての対話やアドバイス等）ようなふりかえり

【教師の言葉かけにより期待すること】
○　課題解決に必要な具体的な動きやめざす動きが分かる。
○　自分の動きのよさを知る。
○　仲間の動きのよさが分かる。
○　課題解決に必要な具体的な動きやめざす動きと自分の動きとを比べ、動きをどう修正していけばよいかを考える。
○　課題解決に必要な具体的な動きやめざす動きと仲間の動きとを比べ、動きのポイントを基に身体の動かし方等についてのアドバイスを考える。
○　動くきっかけ（タイミングや力加減等）をつくる。
○　動くことに対して勇気をもつことができ、「試したい」「動きたい」「高めたい」等といった意欲につなげられる。

等

研究の実際

1　子どもが「学びをつなぐ」ための学習指導の在り方

⑴　運動に多様にかかわるための学びの視点の在り方

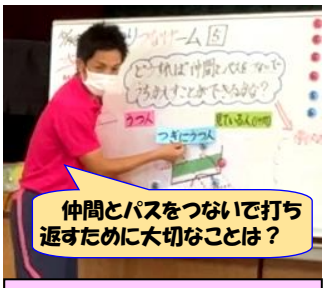
単元をとおして、学習課題に応じて、どの立場にどのような内容の学びの視点をもたせるかを工夫し、対話させることで、協働的に学びをつなぎながらより運動に多様にかかわることができるようにした。

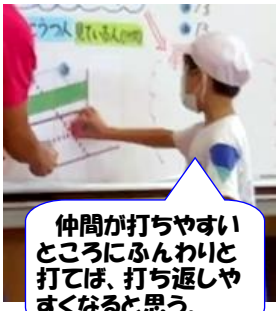
第２学年　ボールゲーム「ふんわりつなゲーム」～第５時～

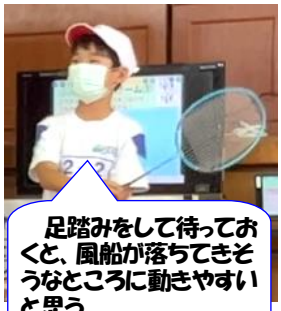
学習課題：どうすれば、仲間とパスをつないで打ち返すことができるかな？

手立て：ゲーム（前半）において、風船を落とさずにタイミングよく打ち、仲間とパスをつないで返球するためにはどのようなことが大切かを問い、３者が既習を基に以下の学びの視点をもつことを期待した。

学びの履歴







もたせたい学びの視点

- 打　者…仲間が打ちやすい方に打つ。力を加減して打つ。（打つ方向、力加減）
- 非打者…仲間が打った風船が落ちてきそうなところに動く。（落下点への移動の仕方）
- 観察者…うまくパスや返球をする仲間は、どんな動きをしているか。（打ち方、移動の仕方）

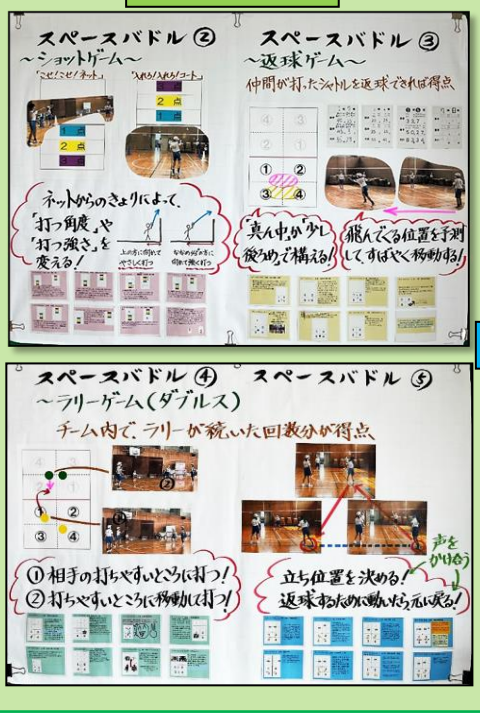
子どもは、既習を基に、打者(非打者)の立場における大切な視点をもつことができていた。しかし、グループ内で発言する子どもが限られていたため、全体的に学びの視点をもたせることができたとは言い切れない。

第６学年　ボール運動「スペースバドル（ネット型）」～第６時～

学習課題：相手よりも多く得点するには、誰がどうすればよいのかな？

手立て：１回目のゲームにおいて、相手よりも先にミスしないためにどのようなことが大切かを問い、３者が既習を基に以下の学びの視点をもつことを期待した。

学びの履歴



もたせたい学びの視点

- 打　者…返球した後、どのような動きをすればよいか。（ポジショニング）
- 非打者…相手からの返球をうまくレシーブするための位置取りはどうすればよいか。（ポジショニング）
- 観察者…返球した後の２人の位置取りはどうすればよいか。（ポジショニング）

１回目のゲームの段階では、３つの立場のそれぞれに学びの視点をもたせることは難しかった。子どもの発言によれば、「打者がどこに、どう打つか」ということが自然な思考の流れであった。

⑵　自発的なふりかえりを促すための教師の言葉かけの在り方

よりよい自発的なふりかえりを促すための教師の言葉かけを工夫することで、子ども自身が自分のよさや可能性を認識するとともに、仲間を価値ある存在として尊重しながら運動することができるようにした。

第２学年　ボールゲーム「ふんわりつなゲーム」～第５時～

手立て：ゲーム(後半)において、「仲間とつなぐ打ち方」について言葉かけをし、より多く得点するための動きについてチームで考えることができるようにした。

場面：ゲーム中
状況：仲間にパスをつなぐ局面
対象：打者、非打者
期待：課題解決に必要な具体的な動きや、動くタイミングが分かる。

仲間の斜め前に打ってごらん！

ネットの方を向いて仲間に打つと他のところにいってしまうから、仲間の方を向いて打つとよいです！

【A児のふりかえり】

仲間が、風船をどこに打っているかをよく見て、仲間の方に打てば、長く続けられます。

【B児のふりかえり】

仲間とつなぐ打ち方について、子どもの運動課題の実態を基に、対象を焦点化して言葉かけを行った。そうすることで、課題解決に必要な動きを仲間と実践したり、仲間からのアドバイスを基に自己の動きを修正したりする子どもの姿が見られた。

第６学年　ボール運動「スペースバドル（ネット型）」～第６時～

手立て：２回目のゲームにおいて、「相手のミスを誘うような返球」について言葉かけをし、相手よりも多く得点するための連携した動きをチームで考えることができるようにした。

2人の間に打ってごらん！

場面：ゲーム中
状況：相手がサーブを打ってくる前
対象：打者、非打者
期待：課題解決に必要な具体的な動きが分かる。

【C児のふりかえり】

相手のミスを誘うような返球について、場面や状況等を考慮して言葉かけを行うことで、動きを実践し、よさを実感したり、成功のために仲間と対話したりアドバイスをしたりする姿が見られた。

今年度の研究のまとめ

1　子どもが「学びをつなぐ」ための学習指導の在り方

⑴　運動に多様にかかわるための学びの視点の在り方

○　課題解決に必要な動きについて、既習を基に丁寧に問うことで、低学年においても、学びの視点をもち、仲間と学びをつなぎながら運動に多様にかかわらせることができる。

●　学びの視点をもたせるためには、ルールに基づくゲーム様相を捉えさせたうえで、既習の学びとのつながり（段階的な学習課題の難度の高まり）や実態（技能の習得状況や思考の流れ）を意識して学習課題を設定することが必要である。

⑵　自発的なふりかえりを促すための教師の言葉かけの在り方

○　場面や状況、タイミング等を考慮し、意図をもって言葉かけをすることで、課題解決に必要な具体的な動きが分かり、そのことが動くきっかけにつながり、仲間と動きを確認したり成否について対話したりするなどの自発的なふりかえりにつなげることができる。

●　低学年の子どもが、自発的に自己の動きをふりかえるためには、段階的に学習課題の難度が上がる単元を計画したうえで、既習を導き出すことができるよう具体的に問いかけることが必要である。

参考文献：「資質・能力」を育むボール運動の授業づくり　岩田　靖他　大修館書店　2018
：楽しい体育の授業　５月号　授業マネジメント　明治図書　2022